

川崎病急性期頸部リンパ節の電顕的検討
(分担研究：川崎病の病因および発生機序に関する)
免疫病理学的研究

武村 民子

要約 川崎病3例の急性期頸部リンパ節を電顕的に観察した。一例にフィブリン析出を伴う旁皮質の壊死がみられ、毛細血管後細静脈基底膜の疎解が著明であった。ウイルス様粒子はリンパ球、マクロファージ内には確認できなかった。

見出し語：川崎病，頸部リンパ節，電子顕微鏡。

研究方法 リンパ節は1~2mm角に細切し、2.5%グルタルアルデヒドにて固定、オスミウム酸で固定後、型通り脱水しEPON812で包埋。メチレン青染色1μ切片にて病変部をトリミングし、超薄切、電子染色を施しLEOL 100CXにて観察した。

結果 3例とも皮質リンパ小節の軽度の反応性肥大、sinus histiocytosisがみられ、一例では旁皮質の毛細血管後細静脈(postcapillary venule, PCV)を中心に壊死を認めた。PCV基底膜は疎解し、フィブリンの析出もあるが好中球は極めて少なかった。内皮細胞は腫大するも、

その胞体内やリンパ球、マクロファージ内にはウイルス様粒子を確認することはできなかった。またPCV内皮下などには高電子密度の沈着等を認めない。

考察 川崎病の病因は未だ明らかにされていないが初期には全身の微小血管炎ともいべき状態が生じている。今回のリンパ節の検索でPCVを中心とする血管障害、T細胞領域の壊死は原因としてのウイルスの関与を尚、示唆するものであろう。今後、少ない症例で包埋後の免疫電顕により病変部位のリンパ球の関与につき検討する予定である。

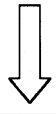
Abstract

Summary: Cervical lymph nodes from 3 infants with acute phase of KAWASAKI's disease were examined ultra-structurally. Necrosis with fibrinous exudate was found in one case. All the cases revealed slight reactive follicular

hyperplasia and sinus histiocytosis.

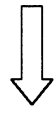
In one case with necrosis, necrosis was seen in the paracortical area with remarkable rarefaction of basement membrane of postcapillary venule.

Virus-like particles were not detected in lymphocytes or macrophages.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約 川崎病 3 例の急性期頸部リンパ節を電顕的に観察した。一例にフィブリン析出を伴なう旁皮質の壊死がみられ、毛細血管後細静脈基底膜の疎解が著明であった。ウイルス様粒子はリンパ球、マクロファージ内には確認できなかった。